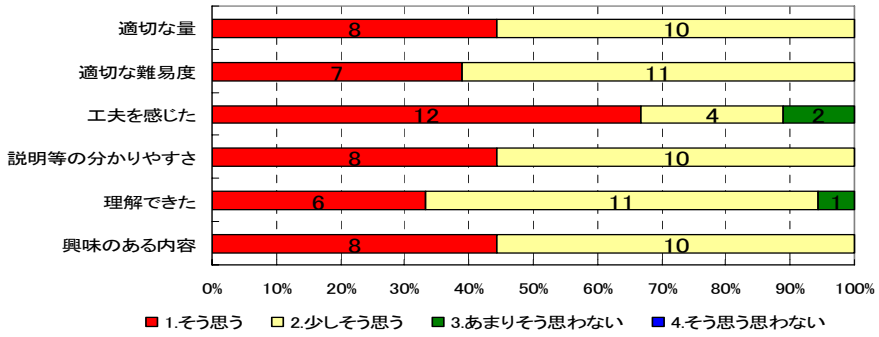
新設授業科目　改善策（　開講科目名：　大学教員教職実習　）

担当教員名【　佐久間春夫　】

① カリキュラムの改善点、

初年度ということもあり、大学側と附属側との教務上の調整に時間的なズレが生じ、また、履修学生の変更等があり、アカデミック・ガイダンスとしては必ずしも附属側の要望に応えられるカリキュラム内容でなかったが、受講生の評価は高かった（下図参照）。



なお、今年度の履修学生２名の講義題目は、「達成動機とストレスコーピング」、「バイオメカニクスからみた“動くからだ“の不思議」であった。

② シラバスの改善点

シラバスが、後期課程の学生用と附属の生徒用との２種類の作成が必要となるが、前者については、現状のままで良いと思われる。後者については、履修学生数とその専門（狭義の）が確定してから作成する為に、附属側のオリエンテーションに十分な説明ができず、真に関心のある生徒を集めにくい。前述と重複するが、履修登録日を早める必要がある。

③ 授業形態の改善点

アカデミック・ガイダンスでは、90 分の講義形態をとるため、可能な限り生徒とのコミュニケーションを計り、実習的（供覧実験的なものも含む）な要素を取り入れることについてオリエンテーションで説明を行った。「なぜ？」の部分を明確に提示することで大学の学問であっても難しいだけにはならないのではないかと感じた。問題を提起して予想をさせたり、逆に何が問題なのかを生徒から引き出してみたりという場面では、想像していなかった答えが返ってくるという反応もみられた。

④ 配布資料の改善点

パワーポイント用の配付資料をもとに講義が進められたが、理解できたかのチェック項目の入ったようなプログラム学習的な資料がより効果的と思われる。

⑤ 履修学生からの感想・反省

今回の体験は非常に衝撃的であり，学びの多様性と可能性を考える上でのよい刺激になった。とかく専攻が異なる院生との関わりが希薄になりがちだが、本実習の中で、関わりの重要性が研究者にとって大切な観点であることを認識でき、授業方略以上に，大学の研究者を目指すものにとって、知的好機動機が必要十分条件であり，いかに大切であるかを学ぶ機会となった